

笠岡市高島 河田浩二氏所蔵 耳形柄頭長剣 調査報告書

日本先史古代研究会 会員 丸谷憲二

1 はじめに

日本先史古代研究会の史跡探訪として7月30日、11月20日に笠岡市高島を訪問した。高島在住の会員、河田浩二氏と薮田徳蔵氏に島内をご案内いただいた。高島おきよ館に河田浩二氏所蔵の青銅剣が展示されていた。紺谷亮一氏(岡山市立オリент美術館・現ノートルダム清心女子大学)の鑑定では、「青銅剣は3000年前のイラン製 極めて貴重」である。長さ75.6cm、重さ1.2Kg、柄頭に穴のある扇状の突起二つが付いているのが特徴である。実戦用ではなくて儀礼用と鑑定されている。



河田浩二氏所蔵の青銅剣

2 高島興与(おきよ)館

高島興与(おきよ)館は平成16年4月に山本米造氏、河田善治郎氏、河田浩二氏の3人の世話人によって設立された高島の資料館である。島内遺跡からの出土品を集めて展示している。高島は神武天皇伝説の島である。

2.1 興与とは

興与(おきよ)とは神日本磐余彦命(神武天皇)妃の興世姫命である。神島神社(岡山県笠岡市神島外浦1706)は、延喜式神名帳に備中小田郡神島神社とあり式内社である。創建は奈良時代(726)神亀3年と伝えられている。祭神は神日本磐余彦命(神武天皇)と興世姫命を奉斎する。「神武天皇は日向より東征の砌、吉備高島に8年間駐屯された。その後、海上より熊野に至り大和^{かしはら}平定後、橿原の地に第1代踐祚の大偉業を成された。妃興世姫命は、部下を率いて当地に駐留され天業を扶翼してこの地に崩御された。近郷住民は、命たちの高き尊き御神徳を畏みて一大崇敬産土神と斎き祀った。」と縁起にある。



神島神社 通称 興世明神(オキヨサマ)

神武天皇の皇后は、『日本書紀』では「媛蹈鞞五十鈴媛命(ヒメタタライスズヒメ)」。『古事記』では「比売多多良伊須気余理比売」(ヒメタタライスケヨリヒメ)、別名、「富登多多良伊須岐比売」(ホトタタライスキヒメ)。神武天皇は、東征以前の日向で吾平津姫を娶り子供も二人いた。『古事記』では阿比良比売(あひらひめ)。神武天皇の日向在住時に嫁し、手研耳命と岐須美美命を生んだ。

興世姫命の記録は神島神社のみである。つまり、笠岡の在地豪族の娘である。在地豪族の娘を正妃とすることで、在地豪族を懐柔していった。私は「吉備國の行館(高嶋宮)は笠岡市の神島宮となる。」としている。

『吉備(黄藤)国・高嶋宮伝承の解析』 丸谷憲二

『古事記・日本書紀』では吉備國に行館(高嶋宮)を設置したのは神武天皇としている。『陶山系譜』に「皇居之名神嶋宮ト侍ル。其後改而神嶋王泊ト号スハ寄ル。皇居地名也。」とある。

『先代旧事本紀大成経七十二巻本』には大歳在とある。笠岡市の馬飼・絵師・金浦・飛島に大歳神社があり、近くの浅口市鴨方町本庄に大歳天神社がある。浅口市鴨方町本庄鎮座の大歳天神社の最初の鎮座地が兄弟神である宇迦大神の山上である。山上より眺め最適の地を探したの意である。

他の高嶋伝承地の近くには大歳神社は無い。つまり、「大歳在」とは「大歳」が先回りしてお待ちしていたと解すべきであり、大歳神は方位神である太歳神と考察すべきである。つまり、吉備國の行館(高嶋宮)は笠岡市の神島宮となる。

3 青銅剣の発見場所

河田浩二氏は自宅改築時に青銅剣を押入れから発見された。入手経路は不明である。2001年(平成13)11月1日の山陽新聞「岡山・オリエント美術館の青銅剣・柄の芯に鉄」の記事を見て、形状がそっくりだとして岡山市立オリエント美術館へ鑑定を依頼された。紺谷亮一氏は「古代イランの青銅剣は1960～1970年代に日本で多く出回った」と報告している。土着民の盗掘による骨董市場への流失を意味している。しかし、河田浩二氏の父親や祖父が骨董市場で青銅剣を購入し押入れに秘匿していたとは考えられない。その理由は購入・秘匿する理由が無いからである。

4 製造推定地 イランの紀元前1000年頃

カスピ海西岸のイラン北西部で製造と鑑定されている。イランの歴史上、紀元前1000年頃の特記事項は、「預言者ゾロアスターがゾロアスター教を広める」である。ゾロアスター教で秦氏の弓月国と繋がる。(弓月は突厥語で火焰を意味する)河田浩二氏所蔵の青銅剣は、秦氏の渡来物と推定可能である。

4.1 製造推定地 タリシュ地方

紺谷亮一氏は北西イラン製のタリシュ地方で製造と鑑定している。当時のタリシュ地方は豊富な鉱物資源を生かした冶金術などが発達していた。岡山市立オリエント美術館蔵の耳形柄頭長剣も主にタリシュ地方で発見されている。タリシュ地方はイラン高原の主要な文化として「タリシュ ドルメン文化」と区分されている。

北西イラン タリシュ地方



4.2 ドルメンの定義

ドルメンとは巨大な石(岩)を利用して築造した巨石記念物の一つで地上や地下に屍を埋める石室を作り、

上に大石で覆いだ先史時代の墓である。ドルメンはメンヒル、列石、環状列石、石棺墓といっしょに巨石文化の一種である。ドルメンを日本では支石墓と呼んでいる。中国ではドルメンを石で作った家という意味で石棚と言う。墓部屋が土の中に埋められていて大石だけ現われているドルメンは「大石で墓部屋を覆いだお墓」として大石蓋墓と区分している。

4.3 河田浩二氏所蔵 耳形柄頭長剣の類似品

紺谷亮一氏は「形状、模様等から古代イランの物にまず間違いない。柄には美術館の物には無い斜めの模様が有り、刃、柄、柄頭を組み合わせる分割鑄造がなされているなど資料として極めて重要」と報告している。岡山県立図書館での文献調査では、中近東文化センター蔵(東京都三鷹市大沢 3-10-31)の「鉄芯青銅柄剣 ギーラーン 前2千年紀後半～前1千年紀前半 青銅 L65.5」が類似している。



中近東文化センター蔵 鉄芯青銅柄剣
ギーラーン 前2千年紀後半～前1千年紀前半 青銅 L65.5 cm

耳形柄頭長剣は主にタリシュ地方で発見されている。柄頭は半円形もしくは扇形の突起が2つ付いているのが特徴である。この形状はメソポタミアに分布している半円状突縁付柄剣の柄頭と酷似している。

5 岡山市立オリエント美術館の活動

5.1 古代イラン秘宝展 平成14年

古代イラン青銅器、特に剣において非常に興味深い事実を発見しました。今まで青銅製剣とされてきたものの柄部分に鉄芯が使われていたのです。このような銅と鉄を組み合わせる高度な技術はバイメタル技術と呼ばれます。これにともない鉄芯に関して化学的分析を行いました。興味深いのは軟鉄が使用されていたことです。さらに鉄成分中にアナトリア(トルコ)・ヒッタイト時代の鉄成分と類似した酸化化合物が含有されていることが判明しました。3千年前とは丁度、青銅器時代から鉄器時代への過渡期にあたります。しかしバイメタル技術はなぜか製鉄技術の故郷とされるヒッタイトでは確認されていません。どうしてイランにおいてのみバイメタル技術が発展するのでしょうか。また鉄芯使用にはどのような意味があるのでしょうか。機能的もしくは呪術的意味があったのでしょうか。



岡山市立オリエント美術館蔵 鉄芯青銅柄剣
北西イラン 前2千年紀後半～前1千年紀前半 青銅・鉄 L53.3cm

5.2「鉄芯入りの古代オリエントの青銅剣」JFE テクノリサーチ株式会社報告



紀元前1千年紀初頭イラン北西部のルリスタン地方で作られたとされる青銅剣の柄(つか)の芯に鉄が使われているのではないかとということで、岡山市立オリエント美術館殿から調査を依頼されました。工業用X線透過装置で観察したところ、青銅と鉄を使用して作られた柄の部分の状態が明らかになりました。写真1と2は、青銅製柄頭(つかがしら)の先端部の外れた青銅剣の外観です。写真3と4は柄部分のX線透過写真です。写真1, 2, 4で、柄の先端にわずかに突出した部分が見えますが、それが鉄芯です。写真3中の細かい筋が鉄芯と青銅の境界を示しています。柄の中心部全長にわたって鉄芯が入っているのが分かります。写真4から柄と刃の接合部に隙間が観測されます。また、青銅の刃を接合するために鉄を刃の周囲に回して装着している様子が分かります。柄と刃との接合方法についても現代の替え刃方式を先取りしていた感があります。鉄器時代初期に、これだけの技術があったのは、まさに驚嘆に値します。露出している鉄芯先端部を用いて化学成分分析、金属組織観察、硬度試験なども行いました。その結果、2種類の比較的純度の高い軟鉄で折り返し鍛錬されていること、また、鉄の中の介在物(不純物)は同時代のトルコ遺跡出土鉄器の介在物成分と類似していることなどが分かりました。

2001年11月に開催された「日本西アジア考古学会第3回公開セミナー」で、これらのことが発表1)されて大きな反響を呼びました。

6 まとめ

「タリシュのドルメン文化」に注目する理由は、カスピ海沿いのイラン西北部からカフカズの東南部にわたるタリシュ地方に、大きな塊石で作られ、上に大きな平石を天井板として乗せたドルメン形式の円形や矩形の墳墓が多数群在し、それらにはストーンサークルが伴い、そこから青銅や鉄の利器類他が出土しているからである。ゾロアスター教とストーンサークルに注目している。吉備国のストーンサークルは「楯築遺跡」に代表されるが、「高島にもストーンサークル」との藪田徳蔵氏説の説明があった。



楯築遺跡のストーンサークル

耳形柄頭長剣は高島迄、秦氏の渡来物として運ばれたものであろう。イランの古代史と日本の古代史の関連に注目したい。

7 参考文献

- ① 『青銅剣は3000年前のイラン製 極めて貴重』山陽新聞
- ② 『岡山・オリент美術館の青銅剣・柄の芯に鉄』山陽新聞 2001年11月1日
- ③ 『別冊歴史読本 歴代皇后人物系譜総覧』2002 新人物往来社
- ④ 『吉備(黄蕨)国・高嶋宮伝承の解析』丸谷憲二
- ⑤ 『岡山市立オリент美術館研究紀要 18』[2002.4] 21～29頁
「古代イランの青銅剣再考ー岡山市立オリент美術館所蔵・バイメタル剣」
- ⑥ 『川鉄テクノロジー社内報 KTEC News NO.56』2002 川鉄テクノロジー株式会社
- ⑦ JFEテクノロジー株式会社「鉄芯入りの古代オリエンの青銅剣」
http://www.jfe-tec.co.jp/jfetec-news/k_news/news/56.html
- ⑧ 「古代イランの青銅剣再考ー岡山市立オリент美術館所蔵バイメタル剣ー」『岡山市立オリент美術館研究紀要 Vo.18』21～30頁 岡山市立オリент美術館
- ⑨ 「銅の文明・鉄の文明への新提言ー岡山市立オリент美術館所蔵・ルリスタン青銅剣からー」紺谷亮一 2001 日本西アジア考古学会第3回公開セミナー要旨集 13～16頁
- ⑩ 『古代イラン秘宝展ー山岳に華開いた金属器文化ー』2002 岡山市立オリент美術館
- ⑪ 『広島大学考古学研究室』
http://home.hiroshima-u.ac.jp/kouko/museum/relics_assort/bimetal_wasia.html
- ⑫ 『栄光のペルシャ』編者 平山邦夫シルクロード美術館 古代オリエン博物館 2010 山川出版社
- ⑬ 『江上並夫文化史論集 6 文明の原点オリエン』江上並夫 2001 山川出版社



筆者(丸谷)と藪田さん自作の高島案内板 右端＝藪田さん